

目 次

はじめに

会長 二神 俊一

特集：網野善彦さんを思う

網野善彦さんのこと	編集部	1
網野善彦先生の足跡	神奈川大学日本常民文化研究所所長 関口 博巨	3
網野善彦先生を偲んで	二神 浩三	8
網野先生と二神島	中田 和邦	11
「借用古文書返却の旅」NHK ラジオ放送から	編集部	13

会員さんから

日本の宝石「珊瑚採取発祥地」の小才角	二神 敬志	23
お馬の話	二神 久藏	26
港山二神氏と墓仕舞い	二神 康郎	29
縁とは不思議なものです	大津 英美	32
私の松山	二神 元信	36
思い出のニューヨーク（3）	二神 俊一	41
曾祖父「太郎太」	二神 重則	47
偶然とご縁と 同年会での出会いから	二神 重則	49
古文書との出会い	二神美知子	51
平成に見る忽那氏と二神氏との縁	豊田 渉	53

会則	56
----	----

役員名簿	58
------	----

編集後記	59
------	----

二神系譜研究会への連絡先	61
--------------	----

表紙の写真

1995（平成7）年8月3日、「二神シンポジウム」の午前中に由利島へ渡り、神奈川大学日本常民文化研究所による調査を行なう。由利島の浜辺にて。

はじめに

二神系譜研究会 会長 二神 俊一

当会は2000(平成12)年3月12日に設立し、2025(令和7)年で創立25年を迎えます。

これまでに会員の皆さまをはじめ、関係者の方々のたゆまないご支援・ご協力を得ながら諸活動をおこなってまいりました。そして、一定の成果をあげることができたと思います。ここに改めまして感謝申し上げ、衷心より御礼申し上げます。

思い起こせば、これまでの出来事が昨日のここのように浮かんできます。今までにそれぞれの地域において系譜・調査研究を行なってこられたとは思いますが、1996(平成8)年に二神重則さんが「二神さんのホームページ」を立ち上げたことを契機として一挙に具体的・組織的な活動が始まったといえるでしょう。その後、準備会を経て当会の発足に至ったことは言うに及びません。

今号では、当会において絶大なるご尽力をいただき、亡くなって20年になることもあり網野善彦さんの特集を組んでみました。会員の皆さんの原稿はもちろんのこと、神奈川大学日本常民文化研究所関口博巨所長にご寄稿いただきました。関口所長には1999(平成11)年5月30日の「第1回二神島交流会」で講演をしていただきました。

会員の減少や高齢化など厳しい状況であるとは思いますが、「それぞれのことをできる人が、できるときにできることをやっていただければ」という気持ちでやっていきましょう。数や年齢などではなく、一人ひとりが会を思う気持ちが励みになっていくのではないかと思います。当会の存続が危惧されるような今日ではありますが、今一度踏ん張って次のステージに繋げ、今後とも皆様方のご尽力ご協力をお願いいたします。

網野善彦さんのこと

編集部

2004（平成16）年2月27日、網野善彦さんは76歳で亡くなられた。二神島をはじめ長年にわたって愛媛での研究・調査に従事され、二神系譜研究会においても深い関わりをいただいた。網野さんが残してくれた業績をたどりながら、その思いを繋げていきたいと思う。

今回、網野さんへの思いなどを何人かの方々にいただいた。

◇網野善彦さんの略歴

- 1928（昭和 3）年 山梨県に生まれる
- 1950（昭和25）年 東京大学文学部国史学科卒業
卒業後は、日本常民文化研究所研究員、
東京都立北園高校教諭
名古屋大学助教授、
神奈川大学短期大学部教授
神奈川大学日本常民文化研究所所員など勤務
専攻は、日本中世史、日本海民史
- 1954（昭和29）年 水産庁の仕事で初めて二神島へ来島し、
二神家の「二神文書」を借用。
- 1982（昭和57）年 「二神文書」返却のため、28年ぶりに二神島を訪問。
訪問返却と同時に、二神司郎さんから文書類を神奈川大学にその保管と研究を委ねられる。
- 1983（昭和58）年 二神文書に関連する調査のために二神島訪問。
由利島の調査も行なう。
- 1985（昭和60）年 二神島調査のために、西和夫常民研所長と二神島訪問。
- 1994（平成 6）年 7月、「二神文書」譲渡のため、西和夫氏と共に二神島訪問。
11月、再び譲渡手続きのため松山へ。

- 1995（平成 7）年 3 月、「道後湯築城跡を守る会」総会で「中世の伊予と河野氏をめぐって」と題して講演。
8 月 3 日、二神島での「二神島シンポジウム」で記念講演。
演題「二神島の調査から見えてきたもの」
この年から、二神島総合調査開始。
翌年から「二神家墓地発掘調査」及び整備で
1998 年、2000 年、2002 年と続けられる。
この間、網野さんは 2000 年までの調査に参加。
- 1996（平成 8）年 3 月 24 日、愛媛県歴史文化博物館（西予市）の企画展「伊予の水軍」で講演。演題「海の民と海賊」
- 1997（平成 9）年 1 月 12 日、広島県尾道市で開催の、しまなみシンポジウム「瀬戸内の海民たち（Ⅰ）」で講演。
- 1998（平成 10）年 3 月 1 日、愛媛県今治市で開催の、しまなみシンポジウム「瀬戸内の海民たち（Ⅱ）」で講演。
3 月末、神奈川大学を退職。
- 1999（平成 11）年 5 月 19 日、第 47 回全日本広告連盟松山大会、記念講演講師で松山へ。演題「瀬戸内海のひとと一海道の社会の歴史が伝えるもの」
5 月 30 日、今治市での「太平記の里」シンポジウムで記念講演。演題「南北朝動乱の歴史的意義について」
8 月 3 日、二神司郎さん逝去（92 歳）

網野善彦さんの詳細な略歴や著作については、神奈川大学日本常民文化研究所関口博巨所長の稿をご覧ください。

註：筆者によって、二神司郎または二神司朗とあるが、そのまま掲載。

ちなみに、「司郎」は本名、「司朗」は雅号である。

網野善彦先生の足跡

神奈川大学日本常民文化研究所 所長 関口博巨

略歴

網野善彦は、日本中世史を軸に列島社会の歴史を大胆に読み直し、「日本」とは何かを問い続けた歴史研究者である。その歴史学は「網野史学」と呼ばれている。まずは網野の経歴をかいつままで紹介しておこう。

1928（昭和3）年、山梨県東八代郡錦生町（現笛吹市御坂町）に生まれた網野は、東京芝の白金小学校、東京高等学校尋常科（旧制中学）、同高等科（旧制高校）文科を経て、東京大学文学部に進学した。1950（昭和25）年、国史学科を卒業後、恩師の寶月圭吾の紹介で、財団法人日本常民文化研究所（財団常民研）月島分室に就職したが、水産庁から財団常民研に出ていた予算が五カ年で打ち切りとなり失職。以後、ドイツ語の翻訳業、出版社でのアルバイト、都立北園高校の教員などを経て、1967（昭和42）年、名古屋大学文学部助教授に就任した。

神奈川大学短期大学部教授に着任したのは1980（昭和55）年10月、52歳のときである。当時、神奈川大学には財団常民研を招致する構想があり、それを前提としての異動であった。翌年7月に神奈川大学日本常民文化研究所（神大常民研）が設立され、所員に就任した。1993（平成5）年には大学院歴史民俗資料学研究科が開設され「系譜・伝承資料学特論」を担当する。1995（平成7）年に経済学部特任教授となり、1998（平成10）年、70歳で神奈川大学を退職した。以後はフリーの歴史研究者として、執筆・講演などの活動を続けた。

著作

20 代後半から 30 代にあたる困難な時期には、財団常民研月島分室や東京大学史料編纂所で、古文書・古記録を丹念に読み込んだ。「霞ヶ浦四十八津と御留川」（『歴史学研究』192 号、1956 年）、『中世荘園の様相』（塙書房、1966 年）などは、その頃の堅実な研究の成果である。

名古屋大学に在任中の 40 代から 52 ～ 53 歳頃にかけては、『蒙古襲来』（小学館、1974 年）、『無縁・公界・楽』（平凡社、1978 年）、『中世東寺と東寺領荘園』（東京大学出版会、1978 年）、『日本中世の民衆像』（岩波書店、1980 年）などを著し、荘園公領制の研究と並行して、「無縁」論や職能民・非農業民の研究を展開した。水田中心史観批判を打ち出したのもこの時期であった。

神奈川大学短期大学部に在職した 54 歳から 63 歳前後の約十年間の著作には、『東と西の語る日本の歴史』（そしえて、1982 年）、『日本中世の非農業民と天皇』（岩波書店、1984 年）、『中世再考』（日本エディタースクール出版部、1986 年）、『異形の王権』（平凡社、1986 年）、『増補 無縁・公界・楽』（平凡社、1987 年）、『日本論の視座』（小学館、1990 年）、『日本の歴史をよみなおす』（筑摩書店、1991 年）、『日本中世土地制度史の研究』（塙書房、1991 年）などがある。「無縁」論を踏まえて展開した天皇論や日本論においては、海から「日本史」を読み直すという晩年の研究テーマが浮かび上がりつつあった。1984（昭和 59）年は奥能登時国家文書研究会を始めた年にもあたる。

1992 年頃から 2004 年にかけて、大学院歴史民俗資料学研究科の開設から退職、そして亡くなるまでの間には、『海と列島の中世』（日本エディタースクール出版部、1992 年）、『日本社会再考』（小学館、1994 年）、『中世の非人と遊女』（明石書店、1994 年）、『悪党と海賊』（法政大学出版局、1995 年）、

『続・日本の歴史をよみなおす』（筑摩書房、1996年）、
『日本中世史料学の課題』（弘文堂、1996年）、『日本中世に
何が起きたか』（日本エディタースクール出版部、1997年）、
『日本社会の歴史 上・中・下』（岩波書店、1997年）、『日
本中世の百姓と職能民』（平凡社、1998年）、
『古文書返却の旅』（中央公論新社、1999年）、『「日本」とは
何か』（講談社、2000年）ほか、驚異的な数の著作を遺した。
この時期の網野の日本論は、「百姓と農民は同義ではない」
という主張、いわば「百姓」論をともないながら展開された。

二神島との関係

網野の膨大な著作の多くは、学界ではなく広く一般の人々
に向けて書かれたものであった。活力に満ちた網野史学の本
領は、毎日欠かさずに続けた史料読みの習慣と堅実な地域研
究にしっかりと裏付けられた実証性にあった。瀬戸内海に浮
かぶ二神島（現松山市二神）も、網野の調査地のひとつであ
った。

網野が二神島に初めて渡ったのは、1954年夏のことであ
る。財団常民研が水産庁から受託した調査研究のためであ
った。この時、二神司朗・道夫の兄弟を訪ね、二神家文書を月
島分室に借り受けている。しかしその後、水産庁からの委託
予算が打ち切りとなり、財団常民研月島分室は機能を停止す
ることとなる。

それから三十年近い時を経て、神大常民研の所員になった
網野は、二神家文書の一部が未だ返却されていないことを知
り、1982年、それを返却すべく二神司朗家を再訪する。この
時、司朗氏より古文書を寄託したいとの申し出を受け、翌年
から二神家と二神島の再調査を始めることにしたのである。

二神島との関係はその後も途切れることなく続き、1994年
には二神家文書の譲渡の申し入れを改めて受けた。これを機

に、二神家と二神島の調査は新しい段階に入った。翌年から、神大常民研は網野を団長とする二神家と二神島の総合的研究をスタートしたのである。（『古文書返却の旅』を参照）。

こうして網野は二神島をたびたび訪れ、二神家文書を読み込むうちに、二神島と二神氏はワンセットで「海の領主」の典型的なあり方を示していると考えようになった。「海の領主」二神氏は、島内の館・神社・寺院・城によって浦と泊の二集落を警固し、海民的百姓たちの活動を管理・支配する一方で、河野氏・村上氏と結びつき、海の武士——「海賊」としてその地歩を固めつつ、他方では交通税・入港税免許の特権を保証され、交通・商業にも従事していたと見ている（『日本中世史科学の課題』を参照）。二神島との長いつきあいと現地調査の中で、網野史学の一部は形成されていったといえよう。

なお、神大常民研による二神家・二神島の調査研究は、網野が亡くなった2004年以降も断続的に続き、神大常民研編『論集 瀬戸内海の歴史民俗』（神大常民研発行、2016年）、同編『二神司朗家文書 中世文書・系図編』（同右発行、2018年）、同編『歴史と民俗 35号 特集：二神島』（平凡社、2019年）などにまとめられている。これらもまた、網野善彦が遺した系譜上に位置付けられる成果といえるだろう。

* 「略歴」「著作」のほとんどは、拙稿「高潔の人 歴史学の巨人 網野善彦」（神奈川大学大学史料編纂室編『神奈川大学人物誌 神奈川大学・短期大学部・附属学校編』、2024年、学校法人神奈川大学発行）からの抜粋である。



二神家文書調査時の一コマ。中央が網野善彦先生、右は二神司朗氏、左は西和夫氏
(神奈川大学日本常民文化研究所提供)

網野善彦先生を偲んで

二神 浩三

私が網野先生と初めてお会いしたのは、1995年8月に二神島において「二神島シンポジウム」が開催された時でした。それは、二神司郎先生のお宅に保管されていた膨大な古文書類を調査されてきた網野善彦先生の基調講演を中心にしたシンポジウムでした。

それまで私の知識の中には、「二神氏は藤原氏の子孫で伊予の海賊の子孫らしい」ということくらいしかなかったのです。このシンポジウムを機に、是非、そのあたりの事柄を明らかにしたいという願望から二神島へと足を運びました。網野先生は随分と前から二神氏の所有する文書に興味を持ち、日本常民文化研究所に資料を持ち帰っては研究を進められていました。それらの研究の結果から見えてきたものをまとめたお話でした。その中で、「これまでの歴史は主に陸地の領主から見た歴史であるが、島や半島に住み海を生活の基盤としていた人々から見た歴史は既存の歴史とは異なり、こうした視点で日本の歴史を見直す必要がある」との内容でした。具体的な例として二神氏があり、二神氏は長門の国の豊田氏の分れで、二神島に来て二神氏を名乗ったらしく、その後の活躍をみるとそれは「海の領主」という状況ではなかったでしょう。

基調講演が終わって質疑応答の時間となり、門外漢の私は「歴史というものは誰が創るものですか。歴史家が創るものなんでしょうか」と不躰な質問を投げかけました。先生は「いや、史実の基づいて時代背景に照らし合わせて、間違いの無い事実を述べているものです。」と答えられたと記憶しています。しかし、ものの見方や考え方によって歴史が異なるとすれば、一つの史実に対して幾つかの歴史（書き物、読み物）

が存在するのではないのかという、少しのわだかまりを残したまま、その後の懇親会までも尾を引きました。先生には大変失礼な初対面であったかもしれませんが、その後お会いした時には覚えていてくださいました。

二神島や松山市内で何度かお会いし、杯を重ねるうちにすっかり打ち解けた友人のような間柄になってしまいました。大きな目を見開いて滔々（とうとう）と持論を述べられる先生の情熱に圧倒され、民百姓に視点を置いた先生独自の歴史観が随所に重みをもって、にじみ出る話に酔わされました。やがて、紀伊国屋書店さんからビデオ「二神島」三巻セットが発売され、その中でも先生の普段のお姿と話しぶりにお目にかかることができることは不幸中の幸いです。

先生と私は同年輩であり共に煙草を好んでいましたが、当時、煙草の量は私のほうが多かったように記憶しています。それなのに、肺がんになられたとの報せを受けた時には、些か驚きました。実は先述のビデオ撮りの頃にはすでに発病されていた旨、後になって伺いました。発病後、何度か手術をされたようですが、病床にありながらもご自身で集められた多くの古文書類の一つ一つに命を与えるべく、歴史書の執筆に全力を傾けられました。病に障らねばよいのだがと陰ながらお祈りしていました。

しかし、2004年2月27日に76歳で幽明。その界を異にされてしまいました。室町時代から埋もれていた二神島の二神文書を世に出し、中世の瀬戸内の一角に「海の領主」としての存在を全国的な歴史の中に明確に位置付けていただきました。また、著書の中には私どもの二神系譜研究会の紹介までもしていただきました。

私ども一同、先生の当研究会に対する絶大なご助力に深甚の感謝の意をささげますと共に、衷心からご冥福をお祈り申し上げます。

※「海の民ふたがみ」第7号（2004年12月）からのを整理して掲載しました。



前列左が、前二神浩三会長

2010（平成 22）年「松山島博覧会」会場にて

網野先生と二神島

松山市 中田 和邦

網野先生とのご縁は、私が二神島出身であったことと、網野先生と親交のあった私の師匠二神司郎先生（二神家 39 代当主、洋画家、1999 年：平成 11 逝去）を通してのものであった。

著書『古文書返却の旅』（中公新書）にあるように、網野先生は二神家に 1954（昭和 29）年に初来



島以来、実に 10 回にわたって来られていて、網野史学を論証するうえで瀬戸内海に浮かぶ二神島のことにについて触れられ、総体にわたっての考察から、海の領主としての二神氏に注目している。

抽象的な歴史観しか持たない島出身の私にとっては、小さな島が過分の評価をされることが何かムズかゆくもあった。どうしてこうも二神島に執着するのかということを想うと、長沼賢海、宮本常一、和歌森太郎といった先学が、何故、この小さな島に注目したのか。そのことと無関係ではあるまいが、網野先生の目には二神島が置かれている地図的位置や島の形状といった図像的な読み解きにこだわりの要因があるのではないかと推察できる。もちろん、二神文書の存在と中世以来、絶えることなく在島を続ける二神家が今にあることも重要であった。

数度にわたる二神島総合調査に関わってゆくうち、網野先生の思考や着眼、確固たる信念といったものが私なりに理解でき、膨大な著作にある現場が、この二神島にも出現したことの意味を読み取ることができる。

いっぽう、私的にお願いしたことといえば、二神島で開催した「ジ・アース」主催の「二神島シンポジウム」（1995：平成7年8月3日、二神集会所）や埼玉県大宮市で開いた「田中担三・中田和邦二人展」（1996：平成8年、大宮ゼフィール）のとき、写真家吉岡氏の発案によって同時開催した「海と陸のシンポジウム」で講演をしていただいた。また、道後湯築城発掘現場の実見や二神家古文書の異動にも力を尽くしていただいた。門外漢である私たちには実にやさしく、聲咳に接した幸せを思い、慈悲の笑顔が忘れられない。先生の突然の死は、二神島をめぐる人々、歴史に関心を持つ人にはショックであった。

生涯にわたって挑戦的に歴史学の新しい地平を切り開こうとした、いわゆる「網野史学」の灯は、よもや絶えることはあるまい。

網野先生が歴史学的常識を揺さぶり続けたものは、歴史学の領域を超えて他の分野にも拡がろうとしている。

※ 2004（平成16）年6月26日（土）「網野善彦さんを語る会」資料から

借用古文書返却の旅～ラジオ放送から～

2000(平成12)年2月17日(木)午前4時から、NHK「ラジオ深夜便」の「こころの時代」で網野善彦さんが出演し、「借用古文書返却の旅」についてお話ししました。編集部で録音していたものをテープ起こしし、整理してまとめたものを紹介します。放送日は、当会が発足する1ヶ月ほど前のことでした。

【古文書返却までの経緯】

——網野先生は日本史を長年ご研究していらっしゃるわけですが、出版された昔の本を読むというよりも、日本中をお歩きになって古いお宅の古文書を研究されるとか、足でご研究になっている側面が多いように思います。そういう資料はまだ各地にあるのでしょうか。

(網野) 私の場合、鎌倉時代・室町時代が専門ですが、古い文書が各地にたくさん残っているわけではありません。大学卒業後、すぐに入ったところ(仕事)が江戸時代の古文書を調べているところでした。当時、旧家といったお宅は、どこでも古文書をお持ちでした。「こんな汚いもので見せるに値しない」とおっしゃるんですが、あえて「どんな汚いものでも結構ですから」と言ってお蔵に入れてもらいますと、驚くほどの古文書が出てくることがありました。まだ古いお蔵が残っているようなお宅でしたら、江戸時代の古文書でしたら十分にまだ残っているところが多いと思います。

——そういう文書を丹念に研究されますと、日本のいろんな社会の中で行なわれていた生活の暮らしのあとみたいなものが、記録されているということでしょうか。

(網野) そう思います。古いお宅には襖とか屏風とかがございます。和紙の力は凄いもので一度何かの形で使って不要になった文書を張り込むことが多いんです。

——下張りということですか。

(網野) お蔵の中にきちんとしまわれた文書は、保存しようということで残されたと思うんですね。ところが襖や屏風の下に張るものは捨ててしまうものが多いわけです。中世の場合は同じことがあって、

古文書の裏に捨てるはずのものを、もう一度記録をして残されます。その裏に捨ててしまわれるはずの古文書が見られます。これを「裏文書」といいます。

——先生は終戦後まもなく、比較的近世の、しかも古文書を集めて研究されているところに若い研究員としてお入りになっています。当時、水産庁でございますか、どんなことだったのですか。

(網野) 当時、農業改革があり、同じように漁業制度改革を政府、水産庁が実施しておりました。実際、漁村のことは非常に研究が遅れていました。政治上、経済上の改革をするために海の浦・漁村の研究をきちんとやらなければという課題があったと思います。

戦前からできた研究所で渋沢栄一の孫の渋沢敬三が作った研究所が「日本常民文化研究所」というわけです。「常の民」つまり庶民のことをいうのですが、学界でも珍しい「漁業史」をやっていました。敗戦後に水産庁が、研究所に漁村の古文書を集めて整理をし、内容をよく読みとって漁業制度改革がきちんとできるようにということで、多額のお金を研究所に委託したわけです。委託された研究所は、月島にあった水産研究所の一室を日本常民文化研究所が借用し、通称「月島分室」と言っていました。

私は大学を卒業しても行く先がなく、そこに籍を置いて仕事をするようになりました。

——最初、おやりになったことは、各地の漁村に出かけて資料をお借りしたんですね。

(網野) 当時、写真機がなかったものですから拝借して月島へ持って帰って、一点一点整理をして大事なものは筆写をし、正確な写本を作ってお返しするという手順で始めました。ところが、誰もこの仕事がどんなに時間がかかるかということを知らなかったんです。若い研究員が10人くらいいましたから、全国から古文書をどんどん拝借してきたわけです。

——旧家の方としては大事な資料ですが、よく貸して下さったんですね。

(網野) そのころは「持っていったいいよ」という方もかなりおい

でした。しかし、大事なものですから借用書を書いてくるのが多かったんです。敗戦直後で、まだ古文書の大事さがさほど認識されていなくてたくさん借りてきました。これが後でひどいことになるのですが。6年ほど事業が続き、そのうちの3年間くらいはどんどん拝借してきたという状況でした。

——その後の経緯は、たいへん複雑だったようですが。

（網野） 水産庁が漁業制度改革のために（予算を）つけたものですが、いろんな事情で「あんな変わったところにお金を出して・・・」と、1955（昭和30）年頃になると水産庁の中にもありで、予算が切られてしまいます。

——そうしますと、研究の活動のもとになる借用した資料は、その後どうなったのですか。

（網野） 研究員はみんな失業してバラバラになりました。ただ、仕事を始められた私の先輩の宇野修平さんは、まだ36歳ころでしたが「資料を集めた文書館を作ろう」との夢をお持ちでした。でも、思いのほか仕事に時間がかかるのと水産庁も状況が変わってきたということで、100万点近い文書が返却できないまま、一部は水産庁資料館に寄贈され、残りは宇野さんの勤務先の東京女子大学に（東京女子大学に責任はないのですが）倉庫が空いていたので預かってもらいました。それが1、2年続いたと思います。

——その宇野さんが1967（昭和44）に亡くなるんですね。

（網野） 集めた資料は水産庁が1965（昭和42）年に終戦処理費と称して、1年間だけの約束で予算を付けてくれました。それでほとんど返却できたのですが、宇野さんや宮本常一さんが拝借されたものとか、要するに若い研究員以外の方の借用されたものは事情があって少し残しました。宇野さんがお亡くなりになって、結局その文書類は日本常民文化研究所が責任を持って預かりましたが、十数年放置せざるを得なかったのです。

昭和35年頃に各地で県史・市町村史の作成が始まりまして、調査員が調べて歩きました。「あの文書は、むかし若いのが来て持っていった」とか「水産庁が持っていった」とか「常民文化研究所が持っていっ

た」とかいう返答でした。そうすると研究所におりました私の友人で河岡武春さんのところへ、地元から催促が来るわけです。

その当時、私は名古屋大学にいましたが、「どうしたものだろう」と河岡さんから相談がありました。意図としては立派なことで始めた仕事でしたが、不評のみで終わるのでは関わった人間としても残念になると思って「一生のうちにこの仕事を片付けたい」ということを神奈川大学にいる頃に考え始めていました。

——先生は名古屋大学で文学部の助教授をやっておられて 1980(昭和 55) 年に神奈川大学に移られます。これは返却の事業を進めるということですか。

(網野) 私は、そのためにだけ異動しました。私が一番、河岡さんから文書についての相談を受けていたということもありますし、私自身が借用した文書も残っていました。ですから、どうしてもいつか、返却をきちんとしなければと思っていました。文書の行き先を探していたら神奈川大学が名乗りをあげてくれまして、研究所を引き取っていただいたわけです。

——日本常民文化研究所ですね。

(網野) 私は「古文書の仕事をやらせていただけるなら」という条件でしたが、神奈川大学のほうが快く受け入れてくださいました。

——中世の歴史を専門に研究されている先生としては、名古屋大学は学者としての環境は恵まれていたのではないですか。

(網野) 人間生きているうちにやらなくてはいけないことをやらないでしまうと、一生の後悔を残すだろうという気持ちが強くて、研究員が一番元気なころに古文書をみんなが拝借したものですから、名古屋大学にいるとき、能登へ行く機会があり、能登に古文書がないのは「上杉謙信と常民文化」という諺までできてしまっている状態だったんです。

——文化的な侵略者だったんですね。

(網野) 決して研究所はそんな意図はなかったのですが、略奪者だったと。そういう一種の研究所に対する批判はありました。それは、お返しすることによって少しでも研究所の不評をなくせたらということ

を考えましたから。神奈川大学にはずいぶんど迷惑だったかもしれないです。

——先生が神奈川大学に転じられて、本格的な返却の作業をすすめられた。そして、借用して30年経っているわけですが、それから全国をお歩きになって返却の長い旅が終わりましたのが1998(平成10)年ですか。

(網野) そうですね。ただ、1967(昭和42)年に大量に返却はしておりますが。

——100万点のうち何十万点かはお返ししたわけですね。

(網野) 残ったのは数万点でした。どんなに少なくとも返却のし残しがあると、古文書という長い歴史を考えた時、1点でもおろそかにできないのです。現在でもまだ少しは残っていますが、目途はついたと思います。神奈川大学は1998(平成10)年に退職しました。後はもう、同僚にお任せして大丈夫だと思います。

【対馬宗家文書】

——ほぼ20年間の返却をおやりになって、文書の持ち主でいらっしゃる各地の方々との交流があったと思いますが、返却の旅で一番最初は対馬の宗家文書ですね。

(網野) これは宮本常一先生が借用されたと思うんですが、非常に立派な大きな帳簿が何十冊もあったのでしょうか。対馬藩の漁業関係の記録です。江戸時代のもので対馬の宗家が漁業関係のものを藩として記録したものだと思います。それを見たときにびっくりしました。宮本さんが借用文書のことを気にしてらしたのは、これか！と。宮本さんから電話をいただいて「名古屋大学から神奈川大学へ移るというのは、自分としてみたら地獄から這い上がるようだ」とまで言ってくれました。

——それは宮本さんが「お借りになったことを返さないでいる」ということで自分の責めをおっしゃってるんですね。それを先生にお託しになったということですか。

(網野) しばらくして宮本さんはお亡くなりになるんです。この文

書がどうも宮本さんの「地獄に落ちた」とおっしゃった原因の一つだと思ったものですから。まず写真を撮ってからお返しをするということで手を付けました。当時、所長の山口徹さんと二人で対馬に渡りました。

——1982(昭和 57) 年 11 月ですね。

(網野) 研究所が神奈川大学に移ったのがその年ですから、一番最初の仕事でした。宗家の文書を厳原(長崎県下県郡厳原町。現、対馬市厳原町)の歴史資料館で館長さんにお会いし、「申し訳ございませんでした」と古文書を差し出しました。顔の怖い先生でして、怒鳴りつけられると思っていたのですが、膝をポーンとたたきましてね「網野さん!これは美挙です、快挙です。今まで持っていった人で、返しに来たのはあなたが初めてです」とおっしゃられました。正直言ってほっとしました。宗家の古文書の倉庫の中の棚に漁業関係のものが一つもないんです。そこの館長さんが文書をドサッと置かれまして「これで(文書が)帰りました」とおっしゃいました。宮本さんもお元気だったらどんなにか喜んでいただけたのではと思いました。

【瀬戸内海の「二神家文書」】

——先生は最初から覚悟して返却の旅をスタートされたわけですが、出だしが大変有意義でした。瀬戸内海で二神島というのがありますが、どの辺りですか。

(網野) 芸予諸島の一部になるかと思いますが、忽那諸島という島々があります。中世以来、有名な島なんですが、その中の一つです。

——ここにはやはり、有名な文書があったのですか。

(網野) ここはねえ、1954(昭和 29) 年ころだったと思いますが、まだ研究所が動いていたころ、河岡武春さんと一緒に調査に伺った島です。(私たちも) まだ若くてまだ元気でしたし、交通状況なども今と違ってずいぶん時間がかかりました。とにかく島にお邪魔して古文書をお持ちの二神家に伺いました。

本当に白砂青松といいますか、今でも二神家の窓から砂浜が見渡せる素晴らしい景色が目につかびます。ご当主は二神道夫さんで、その

お兄さんが二神司郎さんという絵描さんで学校の先生をしていました。夏だったもので二人ともおいでで、私どもが借用の趣旨をお話になると、以前に宮本常一さんも島にいらして若干の文書を拝借なさったそうです。

ここには中世文書と江戸時代のがたくさんあるんですね。いささかの躊躇はしたのですが、拝借してよろしいかと伺ったら、司郎先生は非常にご理解がありまして、ぜひ持って行って調べてほしいとおっしゃったので拝借して帰りました。

そのころ、島は漁業が盛んでして、由利島という小さな島が二神島の属島で「由利千軒」という伝承のある島で、そこにも一晩泊まって、イワシ網漁の様子を見せていただきました。

——まだ、活気があったわけですね・・・。

(網野) 朝早く暗いうちに船が出て、イワシをたくさん獲って帰ったのをよく覚えております。

——昭和で申しますと、昭和28,9年でございますか。

(網野) 急いで整理をしまして筆写をとって返却できるところまでの時点で研究所はダメになってしまいます。私も失業状態になったので、宇野修平さんにお任せして「是非、早くお返ししてほしい」と申し上げました。

二神島は中島町に属していて、1965(昭和40)年ころ中島町が町誌を作ることになり、二神家の文書が東京にあるというので町の職員がおいでになり、宇野さんが返してくださって大丈夫だと思っていました。それが、私が神奈川大学に移って調べておりましたら「二神家文書」という箱が出てきたんです。で、これは明らかに返却のし残しだと。別のところに置いてあったものを宇野さんが見落とされたと思うんですが、残ってしまった。

——それをお返しになるのが1982(昭和57)年ですから28年経ってですか。このころは世の中もだいぶ変わって、島の状況も当時とは違っていたのじゃないですか。

(網野) さっそく(中島町役場に)ご連絡しましたら、弟の道夫さんはもう大阪のほうへ出られていましたが、司郎先生はお元気だとい

うので文書を持って伺いました。

島はお年寄りばかりになって、小学校は立派な建物になっていましたが、児童は10人ほどという状態でした。二神家も司郎先生がお住まいのところはきちんとしておりましたが、以前に通していただいたほうの家は草が茫々たる中にありました。砂浜もコンクリートで固められて、あまりの変貌びっくりしました。由利島にも行ったんですが、無人島になっていました。

ただ、お家にある古文書は二神家がきちんと管理をしていました。いろいろと昔話をしておりましたら、司郎先生が突然に「これを神奈川大学に預けるから」と言われました。司郎先生は昨年(1999年8月)お亡くなりになったのですが、その時に「島も私もこういう状態だから、自分にもしものことがあったら、この文書がどうなるかわからないから」というので、驚くべきことに私にお預けくださったんです。文書を拝借したままで大変な不義理をしたのに、文書をお預かりすることになったのです。

それから二神島との交流は続きまして、ほかの古文書をお持ちのお宅や民家の調査なども研究所が全体的な調査を行ない一段落しました。そうしましたら、司郎先生からお礼の連絡がありまして、「島の文書を全部神奈川大学のほうへ寄贈する」とおっしゃいました。これは中世文書で、愛媛県が持っていて当然で、大事になさってと思うのですが、まだ愛媛県の博物館が出来るかできないかの頃であったせいもあるのと、神奈川大学との長年のご縁を二神先生が考えてくださったと思うんです。

——その旧家としては、自分のご先祖の存在証明のような大事な文書ですけれども、二神さんのお気持ちは時代の流れの中で、由緒ある家柄の伝統・歴史を守るというお考えだったのでしょうか。

(網野) まさしく、そういうお気持であったと思いますね。そして、研究所にも一度おいでいただいたことがありまして、非常に研究所がきちんとしていることはご承知だったと思いますので、決心をしてくださったのだと思います。研究所のほうとしては、本来は地元であって大事にされるものをいただくことになったので、それをきっかけに

してきちんとした調査をもう一度、別の角度からやろうということになりました。二神という名字のお宅はあちこちにあるんですね。そうということも含めて少し調べようということになって、島の民家や古文書の調査を新しく始めました。

もう一つ、二神家というのはいわば「海の領主」なんですね。ですから二神さんのお宅は、昔でいうと海賊と言われていたかもしれない。で、ちゃんと港の入り口には城山がありまして、二神家から湾を見通せる見張り所（城山）があるわけです。その間に二神島の海の民の集落がべったりとあるという、非常に珍しい海の領主のワンセットの島です。

——自分の縄張りが、まず島を拠点として押さえて、しかも瀬戸内の海にまで船を使って勢力を及ぼしたということですか。

（網野） その二神家のお墓が、江戸時代、天正年代くらいですから、戦国の終わりのころから現代まで、二神家の谷をおいた山に階段状を成していて、そのお墓を調べたところ、全部の戒名と系図とが一致するわけで、お墓の人がどなたかがわかるわけです。そのうえお墓の中段に、明らかに中世の五輪塔と言われる頭が出ておりまして、これは調べたら中世以来の二神家のお墓が分かるだろうということになりました。二神先生の許可を得て、若干整理しました。案の定、14世紀ころのはっきりした五輪塔が、ちょうど二神家がこの島に入ってきたころ以来からのものが若干出てきたのです。

——系図と対応するんですか。

（網野） まだ系図とは簡単に対応できないと思いますが、鎌倉時代からのが残っているようですので、これから希望を持てると思います。実はこの3月、本格的に中島町のご協力を得て、研究所がかなり予算をつけまして、ほかのいろんなところからの援助もいただいて発掘をすることが決まりました。こういう墓地は、全国的にもまず稀有の例でしてね、文書で分かる、お墓でもわかる、さらに地形とかすべの島の状況が分かるということで、非常に珍しい調査が出来るようになったんですが、司郎先生がお元気だったらと思います残念です。

もう一つ申しますと、それらがきっかけで、「二神」という名字の

方々がご関心をお持ちになりまして、二神島でシンポジウムを開いたことがあります。それがきっかけの一つになりまして「二神氏の系譜を研究する準備会」という全国規模の会ができました。これはただ、自分の祖先を検証しようということだけではなく、なぜ「二神」という名字がこんなに各地に散らばっているのかと。古文書をお持ちのところもありますから、二神家の総合的な研究が始まりそうな気配がでてきたということです。

——二神島の二神家が宗家といいますか、ご本家なんですか。

(網野) おそらくそうだと思います。二神島は山がちょうど二つありまして、それぞれの一つ一つが神様だと思います。遠くから見ると二柱の神が居るというふうな、昔の人が考えてもいいような島です。地名としては、ここが二神。海の領主ですから、海を通して、たとえば豊後大分に、あるいは伊予の本土の北条地域にいる、またもっと奥にいるというふうな。最初どうしてか、もっと広い範囲からここにもいるよという方が現れて、どういう事情で、いつ二神家が各地に行ったのかという、日本の社会というのは非常に面白いところがありまして、どの名字でもそういうことが言えるのですが、決して一つの名字が一つのところに固定して動かないことはない。非常に広いネットワークがあるんです。

——それは昔からでございますか。

(網野) 鎌倉時代くらいから、そういうことがあり得ると思います。

——いまのお話ですと、一つの文書というものが漁業制度というか、一つの切り口、一つのテーマによって、とっかかったところを芋づるのように広げて、横に関わりを広げていきますと、地域の社会の全体像からさらに地域と地域の結びつきの歴史まで浮かび上がってくるわけですね。

(網野) おっしゃる通りだと思います。そういう意味では、非常に豊かなものを文書の世界は持っていると申し上げてよろしいかと思えますね。

——本日は、どうもありがとうございました。

日本の宝石「珊瑚採取発祥地」の小才角

小才角二神氏 二神 敬志

『お月さんもいろいろ』松谷みよこの童話に書かれているお月さんは、高知県大月町のお月灘と言われる小才角の海辺にある少女像「おりの」の童話である。

ある日、おりのが海岸で折れた桃色珊瑚を拾って持ち帰ったのが、宝石珊瑚採取の最初だと言われている。また、一人の漁師が網に引っかけたのだとも言われている。「土佐珊瑚採取発祥の地」として国道 321 号線沿いに「おりのが珊瑚を抱いた銅像」がある。



明治の昔、土佐のサンゴ漁業の中心地として名高かったのは、当時の月灘村小才角である。当時のサンゴ漁では詳しい天気予報などは無く、荒天の海へ手漕ぎの伝馬船で出漁した。同船が転覆し、多くの犠牲者を出すという痛ましい事故もあった。

こんな唄がある。

土佐の月灘 珊瑚の船が

白草沖に珊瑚取り にわかに吹きくる山北に

櫓櫓もたたず 帆も巻けず

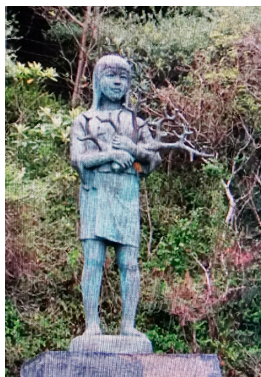
あっち向いて流ゆく こっち向いて流ゆく

ながれつのが赤江灘

明治時代の小才角は、港らしい湾入もなく伝馬船も岸に引き上げていた。この村が珊瑚景気で沸き返り、神戸やイタリアなどからも宝石珊瑚のバイヤーが来ていたという。嘘のような話だ。

『ものと人間の文化史 91 “珊瑚”』（鈴木克美著）。223 ペー

ジに「高知県大月町の旧家二神家では1844（弘化元）年以前に、土佐近海で密かにサンゴが採取され、文久年間（1861～64）に自家で制作されたという。モモイロサンゴとアカサンゴを組み合わせ彫刻した置物が伝えられている」と書いてある。



また、『宝石サンゴ その夢とロマン』（新谷虎重著、小才角出身）。159 ページには「明治40年頃の夏のある日の事、その日は東風がそよそよと吹き絶好のサンゴ日和だった。二神徳次さんの船は4人乗りであったが、その日は甥の光三郎さんを朝早く起こして二人で漁場に向かった。3貫余り（約11kg）の生木の桃色サンゴを採取した。当時の代価1千円（約400万円、明治30年の1円が現在の3800円とした場合）を越す大物であった」。

近代においては、小才角のサンゴ漁は少なくなっているものの無くなってはいない。遠洋大型船でのサンゴ漁が主流で続いているという。小才角港も整備され立派になっているが漁業従事者が少なくなった。宝石珊瑚の彫刻師も私の年代で、小才角からは多く出ている。

YouTubeで、お月さん桃色・COSAなど大月町文化教育交流拠点として、旧小才角小学校でたくさんの情報映像作品が

確認されるようになっている。また、小才角の上空からの映像もいくつか確認される。

私事の報告ですが、2021（令和3）年の暮れに体調不良になり、調査の結果で大腸がん判明。2022（令和4）年、抗がん剤注射後、神戸大学医学部付属病院で5月26日手術日決定。直腸近辺だったため、仮の直腸迂回手術も同時に実施。12月、神戸大学 ICCRC（国際がん医療・研究センター）にて仮の直腸迂回手術の復旧手術。2023（令和5）年1月より3ヶ月に1回の通院開始。現在に至る。

2024（令和6）年12月8日記

お馬の話

城辺二神氏 二神 久藏

私が通っている奈良の乗馬クラブ「クレイン」に、「2024年パリ・オリンピック」の総合馬術団体で銅メダルを獲得した北島隆三（39歳）、田中利幸（39歳）両選手が居ます。お二人とも、普段は乗馬のコーチですが、イギリスに拠点を置き活動しています。北島コーチの授賞メダルと一緒に写真を撮りました。

クラブに関係はありませんが、もう一人「1964年東京オリンピック」の馬術競技で、入賞には至らなかったですが、法華津寛選手（註1）がいます。二神系譜研究会の方々もご存じだとは思いますが、彼の祖父・孝治は伊予吉田村法華津出身です。「1964年東京（23歳）～2012年ロンドン（71歳）」まで44年間4度のオリンピック選手に選ばれています。現在82歳で、2024（令和6）年1月20日に都内で常陸宮妃殿下ご臨席のもと、日本馬術連盟から功労者表彰を受けました。妃殿下とは旧知であり、お声掛けに笑顔でお応えする場面もありました。「今後もできるだけ長く、馬術を続けていこうと思っています」と、生涯現役を宣言したとの事です。

その出身地にある「法華津峠」は古戦場（註2）で、宇和島と宇和（現、西予市）を隔てる難所でした。法華津氏の先





【2008（平成 20）年 8 月 14・21 日号 週刊新潮から】

祖は、羽柴秀吉の四国攻めまでは伊予西園寺臣下の法華津城主でした。1970（昭和 45）年にトンネルが開通していて、JR 予讃線が宇和島から松山方面に向かうとき、宇和島側の坂は JR 四国で最も急な勾配で速度が落ちるといわれています。

その難所である法華津峠（標高 436m）は、賛美歌に歌われていると母から聞かされていました。（母は女学校時代、協会に出入りしていたエセクリスチャンでした）。賛美歌、それは外国のもので日本のものは入っていないと頭から思っていました。今回改めて調べてみると、確かに日本初の 404 番に入っている賛美歌「山路を越えて」でした。これを作詞した人は西村清雄（松山市東雲中・高等学校の校長で、松山市名誉市民）、祖父は歌人西村清臣、叔父は道後温泉本館を建てた初代道後湯之町町長伊佐庭如矢です。その歌碑が、旧国道 56 号線を行くと、旧道峠付近の路端に建てられています。

私の先祖に二神深蔵（幼名道太郎、初代城辺村村長、県議会議員、副議長）がいます。父から聞いた話では、深蔵が若き頃の 1866（慶應 2）年、2 回目の長州征伐の際、民兵 67 人を率いて馬に乗り従軍しました。ところが難所である法華津峠を越えて八幡浜に着いたところで、長州は薩摩藩などに鎮圧され命により引き返したとの事。もし、戦闘が続いてい

たら河野水軍臣下の二神組にも頼み、長州へ行ったのでしょうか。

それにしても何故、徳川幕府は四国内で長州征伐一番手を宇和島藩と定めたのでしょうか。四国の端で10万石の貧乏藩宇和島藩に。当時の9代藩主伊達宗徳は、長州攻撃の命は出たものの積極的には動かなかったのです。これは宗徳の先妻が長州藩11代毛利斉元の娘だったので、親戚として可能な限り手を打ったと考えられます。だが、1869（慶應元）年5月の将軍徳川家茂の進発（出陣）に始まり、しぶしぶ出陣したと思われます。四国であれば松山藩15万石、高松藩12万石、徳島25万石が位置的に長州に近い藩があるのに何故だろう。徳川の親藩、外様の違いによる差別的な判断が為されたのでしょうか。

（2024年12月28日記）

参考資料：スポーツ報知、ウィキペディア、愛媛県生涯学習センター

註1：法華津寛の妻元子の父は、NHK大河ドラマ第1作「花の生涯」（1963年放送）を手がけた脚本家の北条誠。

註2：法華津峠古戦場は、戦国時代、伊予・西園寺氏の臣下法華津氏が城を築き、1560（永禄3）年、1570（元亀13）年と法華津範延・前延父子が豊後の大友氏を迎えうち、これを退けたといわれる場所。

港山二神氏と墓仕舞い

港山二神氏 二神 康郎

我が家の歴史

私の家には桐の箱に納められた家系図がある。この家系図には一枚の付箋が付けられていて、それには二神種美氏（戸籍名：二神仲次郎。二神本家の末裔で二神司郎氏の伯父にあたる）が、1890（明治23）年に二神茂七（2世）に贈呈したことが記されている。系図の文字は毛筆で美しくびっしりと書かれており、紙面だけで8メートルほどあるから完成までに相当の時間を要したものと思われる。

私はかつて、故二神司郎氏と二神島でお会いしてお互いの系図を比較したことがある。これによると私の祖先は約300年前に豊田嘉右衛門が分家して二神姓から豊田姓に改称した。この時点以降の我々の系図は、二神本家の系図とは異なっている。当会の豊田副会長はこの豊田氏の流れを引いている。そして約200年前に豊田氏からさらに分家して、二神姓に改称した二神茂七（1世）が二神島を出て、伊予国和気郡新濱村（現、愛媛県松山市港山町）に住みついた。茂七（1世）は1885（明治18）年に78歳で逝去しているから、系図が贈呈された時点では彼はすでに亡くなっていたことになる。系図の作成者はご丁寧にも分家以降の我々の家系を調べ、私の祖父の代までを記載してくれている。

それ以降、私の子どもまでは三津浜信用金庫（2006年＝平成18年、愛媛信用金庫と合併）の理事長を務めた私の父・長憲が記入したらしい。1世茂七から数えて私が5代目の当主になり、その係累を港山二神氏と称している。歴史学者の網野善彦氏は我が家に伝わる系図を見るために何十年か前に、伊予鉄道山西駅に近い両親の家に来られたことがある。私の先祖は生計を何によって支えていたのだろうか。次男で

ありながら家系を継いだ祖父の二神愛次郎は弟儀一と共に「櫓作り」の専門の大工で職場を「櫓屋」と称していた。幼少の頃、三津浜港の傍らにあった櫓屋によく遊びに行ったものだ。1世茂七と2世茂七の職業は何であったのかを聞いたことはないが、察するに自身でやっていたか職人を雇っていたかはともかく、職種は同じだったのではないだろうか。

その当時の二神島を含む忽那諸島の所帯数は現在よりもはるかに多くて交流も繁く、漁師を含む全島民の交通手段は木造船で家ごとに中・小の船を所有していた。そのころエンジン船はほとんど無かったので、動力源としての櫓に対する需要は極めて旺盛だったと思われる。材料である檜の木は1000メートル級の山を越えた久万村（現。愛媛県上浮穴郡久万高原町）から馬車で運ばれてきたらしい。

1世、2世茂七はそれによって財を成し、港山に新居を構え付近の土地も買い占めていた。私の祖父の4人の息子はいずれも都会の大学を卒業しており、膨大な学資も櫓作りでねん出してきたものと思われる。

開始した墓仕舞いの手続き

小生は学生時代に松山を出て東京に住み続け、今や寿命も残り少なくなってきた。ここで気がかりになるのが松山市の梅津寺海岸近くにあるお墓の始末だ。これには大変な手間がかかった。小説「坂の上の雲」で知られた秋山兄弟の銅像がある場所に近い丘の中腹にある松山市営の大入谷墓地には、二神島を出て港山に住み着いた1世茂七以来、四世代にわたる先祖たちが眠っている。小生があのに旅立つと



墓の面倒をは見る人が居なくなるわけだ。

一昨年、墓地の管理をしている松山市役所に電話をすると、二神を名乗る墓はいくつかあり、どれがお宅の墓かわからないという。そこで墓石の両側の墓石も写した写真を市役所に持ち込んで照会し、やっと市役所の図面上で確定ができた。市役所によれば、墓の名義は私の祖父になっており、それを小生名義に切り替えない限り、墓の処理は出来ないという。そこで名義変更の作業を開始したが、これには大変な手間であった。各親族の戸籍謄本や同意書など数多くの書類を提出する必要があったが、時間をかけて何とかクリアし、私名義に変更できた。

さて、今後、墓を処分するにはお骨を東京の私の墓に移すか、地元の菩提寺で永代供養をするかのどちらしかない。地下の先祖たちはあたふたと東京に移転するよりどちらかといえば、このまま地元で安らかに眠ることを望んでいると思われるので、後継者をつくったうえで私が逝去した後も墓はそのままにしておくのが最善の策かと思っている。

縁とは不思議なものです

埼玉県ふじみ野市 大津 英美

はじめまして

私は大津英美といい、当年 70 歳です。現在、埼玉県ふじみ野市の中学校でシルバー人材センターの派遣で用務員をしています。

なぜ二神系譜研究会に入ったかというと、私の母の旧姓は「豊田」で、かつて実家は山口県下関市王喜本町にありました。王喜本町は下関市豊田町の南約 10 キロメートルにあり瀬戸内海に面しています。母は 20 年以上前に東京都で亡くなりました。遺品の中に明治時代の王喜の写真と祖父豊田佐一の書置き（豊田家の祖先は藤原氏か？）がありましたが、長い間忘れておりました。



2 年前に本家が絶えており、墓仕舞いの関係で豊田家の先祖のことを知ろうと思いました。古い戸籍や不完全な家系図（江戸時代後期からのもの）しかありませんでしたので、菩提寺の常元寺（浄土真宗本願寺派、下関市松屋本町）に江戸時代の過去帳を拝見したい旨お願いしました。本山から「門徒といえども開示したら破門になる」ということで見せてもらえず、結局はわかりませんでした。

ただ、古い戸籍で曾祖父の豊田藤三郎の妻モミが萩本藩の中級武士村岡家の一族村岡善二郎の長女であることは分かりました。村岡家の 17 代当主村岡潤一氏は、現在、ふじみ野市を本拠とする「福岡中央公園を愛し育てる会」の副会長をしています。公園内でガーデニングをやっていて、私も日曜日毎に参加しています。実家が同じ山口県であるということで、以前から懇意にさせていただいておりましたが、このこと

入道元秀が1486（文明18）年に大内政弘から「一ノ瀬五十石」を安堵されたという記録があります。元秀の子種道の時、1551（天文20）年大内氏が滅びて浪人となるものの、種道の後の八兵衛種親は、萩藩初代毛利秀就の家臣となったようです。

つまり、山口県内には15代種世の子孫といえる豊田氏は房種の自決により、いないということになります。種世との家督争いに負けたとされる種家の二神氏が正統となる豊田氏の子孫なのでしょうね。

郷土史家の中には、豊田氏初代となる藤原輔長と藤原北家の道隆とは繋がらないという人がいます。藤原道隆のひ孫である長房の子に「輔長」という名が見当たらないことからです。また、輔長は九州肥後の菊池郡を本拠とした菊池氏の支流分家の出であるという説もあります。菊池氏の遠祖である藤原則隆は、藤原道隆の三男隆家の孫で1070（延久2）年9月に肥後国菊池郡に下向して土着し、藤原氏を自称したとされています。そして、1074（承保元）年2月、同深川村に築城し菊池氏を名乗りました。菊池氏の支流分家はたくさんあり、その中に豊田氏もありますので、この豊田氏は今後の調査研究に委ねたいと思います。

なかなか正確な歴史書というものは無いようですので、詳細は分かりませんが、今のところは長門豊田氏の末裔は二神氏であるということだけで十分だと思います。

二神系譜研究会及び伊予との縁

二神系譜研究会や伊予とは、次のような縁があります。会員の方は松山市周辺にたくさんおられるようですが、松山藩は親藩の久松松平家だったようで、私の住んでいる埼玉県ふじみ野市は、江戸時代ずっとではありませんが川越藩で松平家が藩主でした。松平つながりですね。

もう1つは、私の妻の母の祖先が仙台藩の秋保家の留守居役小天文右衛門だということが古文書で分かりました。一瞬、藤原北家藤

原秀郷の子孫かと思いましたが、よくは分かりませんでした。妻は宮城県川崎町の出身で元は仙台藩領です。私も仕事の関係で4年間仙台市に住んでいたのも、仙台藩（伊達氏）には親しみを持っています。宇和島藩の藩主は伊達正宗の長男秀宗（側室の子）ですね。秀宗の子宗純に伊予吉田藩を立藩させていることなどを知りました。

おわりに

今まで愛媛県といえばミカンの産地くらいしか認識しておりませんでした。気候は温暖で温泉もあるようですし、出かけてみようと思います。その時には、松山の会員の方々と一献傾けて二神氏や二神島のことなどお聞きできれば嬉しい限りです。

また、関東周辺の会員の皆様方とも、いろいろお話ができればと思います。もしよろしければご連絡ください。電話は 080 - 5497 - 7242 です。

私の松山

松山二神氏 二神 元信

はじめまして

私の最初の故郷は、「一炊の間の夢の国、大連」です。この地で生まれ幼児期を過ごしました。次は父祖の地、「松山」です。わずか半年の暮らしでしたが、私の芯を成している故郷です。

※一炊の間の夢の国・・・人生の栄華がはかないことのたとえ。

大連から引き揚げて松山に落ち着くに至る思い出を記したいと思います。子ども時代の思い出を書くことは、経験を再現しているに等しく、実に楽しいものです。思うに子ども時代の出来事には、苦いという要素はありません。あるとすれば、大人になって大人の立場で考えたときの評価なのです。



大連

大連は、遼東半島の先端に位置する港湾都市です。大連は、しばしば満州と一体として括られますが、正確には「関東州大連」で日本の租借地でした。満州国は「五族協和」による「王道楽土」建設を標榜して、日本主導によって成立しました。広大な土地が北の興安嶺まで広がっています。南満州鉄道（満鉄）に沿って主要都市が南から北へ、大連～奉天～新京（長春）～ハルピンと続きます。

※王道楽土・・・公平で思いやりのある政治が行われている、平和で楽しいところ。

※興安嶺・・・中国東北地方にある山脈

私の父は仕事で大連に来ていました。大連で応召しましたが無事復員してきました。母も祖父の仕事の関係で大連に来て「大連弥生高等女学校（弥生高女）」を出て、一時は満鉄に勤めたことがあります。

大連は洗練されたシャレた街でした。アカシアの並木が続き、初夏には白い花をつけ、風が香りました。諸官庁が並び豪華な「ヤマトホテル」があり、足を延ばせば「星が浦海水浴場」がありました。半官半民の満鉄は大連から新京間約千キロメートルに「あじあ号」を走らせていました。漆黒で流線型の最新鋭機関車が曠野を黒煙をなびかせて邁進する姿は、「撮り鉄」たちの垂涎の的でしょう。



満鉄の「あじあ号」

手元に母親の大連弥生高女時代の（スケートくつを履いた女学生が横一列にズラッと並んだ）写真が1枚残っています。冬になると校庭は一夜にして結氷し、スケートリンクと化すのです。満州へは新天地を目指して、日本から多くの人が渡りました（昭和7～20年＝1932～45年までの14年間に約27万人が渡った）。大連や満州は日本人にとっては夢の「王道楽土」だったと言ってよいでしょう。

引き揚げ

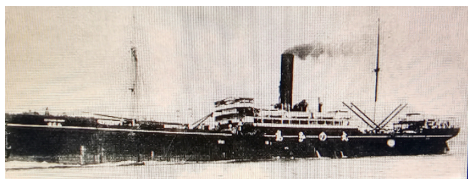
1945（昭和20）年8月、日本の敗戦が決定的となるや、突如ロシア軍が「日ソ不可侵条約」を破り、ソ連・満州の国境を越え満州へなだれ込んできました。関東軍はいち早く退却し、後に開拓団はじめ多くの同胞が置き去りにされました。ロシア軍は日本人に略奪、暴行、虐殺、あらゆる蛮行を働きました。武装解除された日本兵は、極寒のシベリアへ送られました。ソ連軍は大連にも進駐してきました。大連でも夜ともなればロシア兵が日本人の家の扉を「マダム、マダム」と叫んで叩き、押し入ってきます。家人は息をひそめているほかはありません。間に合えば女や子どもは隠したり避難させたりしますが、物（多くの場合は腕時計）を差し出して引き取っ

てもらいます。ロシア兵は全くの未開人で、日本人は憎しみと軽蔑を込めて「ロスケ」と呼んでいました。

※ロシア兵・・・1922(大正11)年12月30日、ロシア連邦共和国にウクライナ、白ロシア(ベラルーシ)、ザカフカス・ソビエト連邦社会主義共和国とで「ソビエト社会主義共和国連邦(ソビエト連邦)」が成立。1991(平成3)年に崩壊して「ロシア連邦共和国」になるまではソビエト連邦。太平洋戦争時、満州、大連に攻めて来たのはソ連軍のロシア兵。

私は幼稚園に通っていました。園舎を背にした集合写真が1枚残っています。私は防空頭巾をかぶって登園していましたが、母から「空襲警報のサイレンが鳴ると叔母さんの家へ行くのですよ」と教えられていました。私が思い出せる光景は断片的で数は少ないのですが、明瞭に脳裏に浮かぶ場面はいくつかあります。例えば大連駅に集結したロシアの戦車部隊を私が眺めている光景です。不思議なのはそれらの情景のいずれにも私が存在し、第三者としての私がその光景を目に収めている点です。ある種、思い出は別々の素材を脳が合成し保存しているのでしょうか。

引き揚げで日本に持ち帰れる荷物は「一人が持てる分だけ。貴金属や宝石類は持ち出し禁止」が当局より知らされました。まず、家財道具の処分をしなければなりません。と共に、引き揚げのその日まで食いつながなければなりません。誰もが大通りに敷物を敷き、その上に家財道具を並べ、捨て値で満人相手に店開きをしました。露店は結構賑わっていました。私も店番に行きましたが、座っているだけでした。貴重品をどうするかで、大人は頭を悩ませていました。無事に日本へ帰れたとしても、当座で生活するお金が必要でした。母は人形の腹を割って、指輪やなけなしの宝石類を埋め込み、また縫い合わせをしました。



信濃丸

私たちは「信濃丸」という船で帰国することになりました。埠頭の建物の中に入ったときは目を見張りました。建物の床と
いわず、廊下といわず、便所と

いわず、紙幣や軍票が散乱していました。どれも精巧で美しい印刷物ですが踏んで歩きました。もうこの先、役にも立たない文字通りの紙くずなのでした。

埠頭の水面には、人形をはじめ雑多の品があちこちに浮いて揺れています。引き揚げ者はいくつかの班に編成されています。誰かの持ち物から禁制の貴重品が見つければ、連帯責任として班の全員が乗船できなくなるという噂が流れていました。夜なべまでして人形などに縫い込み秘かにここまで持ってきたものの、全員が禁足になるのを恐れて海に投じたのでしょう。私の親が無事に持ち帰れたかどうかは知りません。

私たちの班は一番船底へ通されました。そこは文字通り「板子一枚下は地獄」です。明かりはほとんどなく、ほぼ暗闇と言ってよいでしょう。その床に人間がビッシリ。思い思いに横になっていました。世界史に出てくる、人間を収容している「奴隷船の図」そのものといってよいでしょう。違うの

は鎖で繋がれていないことくらいです。食事は要所要所に置いてある大鍋の雑炊とおぼしきものを容器を持って、人の足を踏まぬようによろけながらも入れに行くのです。

私は物珍しさに甲板へ出て走り回っていました。トイレだけは嫌でした。トイレといっても、船べりから海に向かって木の柱を突出して床を張り、アンペラ（筵、むしろ）で囲っただけのもので、海面に向かって用を足すのです。寒いうえ、風がビュービュー吹き上げ、全く弱りました。

松山

「信濃丸」は目指す博多港まで検疫期間を含め、およそ2週間かかりました。日本の山並みがうっすら見えると甲板は、引き揚げ者



大連埠頭

の群れで溢れました。博多に上陸となったとき、船首に立った船長さんの「祖国の土をしっかりと踏みしめてください」の言葉に、私は胸が熱くなりました。

私たち親子は列車に乗り、「関門鉄道トンネル（昭和 17 年開通）」を抜けて尾道に出て、尾道から小さな連絡船で四国に渡る際は夜間で、しかも嵐にぶつかり心細い思いをしました。私は小さなリュックを背負っていました。目指す家に着いたとき「もう歩かなくていいの？」と母に聞いたそうです。私たちの家族は、ここ父の実家に身を寄せ約半年間暮らしました。松山の家には小姑もいて、母はよくこぼしても居ました。

松山の暮らしで弱ったのは風呂でした。昔の家のこと、風呂は同じ敷地にあるのですが、母屋から離れた独立した建物だったため、寒い中を歩いて行かねばなりません。充分冷えた身体を温めるには良いのですが、風呂から上がって戻るとき、せっかく温まった身体がまた冷え、入浴した意味が無くなってしまいました。

松山では母に梅津寺の公園やハイキングに連れて行ってもらったり、吊り橋を渡ったことなどを覚えています。母もまだ若かったのです。私は引き揚げてきた年、小学校に上がりました。学校への道や辺り一帯は菜の花畑でした。小学校の運動会では輪になって「証城寺の狸囃子」を踊りました。松山の風景や生活は、大連や引き揚げ船でのそれとは対照的でした。私はどんな遊びをして毎日を送っていたのか思い出せませんが・・・。

「国破れて山河在り」の世界に溶け込んでいました。

思い出のニューヨーク（3）

会長 二神 俊一

私は1985(昭和60)年5月にニューヨークに行き、1990(平成2)年3月に帰国しました。その5年間弱の事はあまりにもたくさんありすぎて、また、もう40年も前の事でもあり記憶が薄れてしまったことも多いので、今回はアメリカの大統領選挙にまつわる話をしてしたいと思います。皆さんも記憶に新しいと思いますが2024(令和6)年11月5日投票で、黒人女性として初めて大統領選挙に挑んだ民主党候補のカマラ・ハリス副大統領を押さえて、共和党候補のドナルド・トランプ前大統領が当選しました。

アメリカの大統領選挙

アメリカの大統領選挙は4年に一度、通常、夏季オリンピックと同じ年に行われます。有権者が直接候補者に票を投じるのではなく、有権者が州毎に選挙人を選び、その選挙人が地域を代表して、正副大統領を選ぶという間接選挙です。選挙人は各州で州選出の上下両院議員と同数が割り当てられ、首都ワシントンの代表3人を加えた「選挙人(538人)」で構成されています。過半数の270人を獲得した候補が大統領に当選します。メイン州とネブラスカ州を除き、各州で1票でも多く獲得した候補がその州の選挙人全員を獲得する「勝者総取り」方式が採用されています。

なぜ、このような「勝者総取り」システムが取られたかは、次のようになっています。

- ①建国当時はアメリカでは読み書きできない人がいたりして一般大衆にすべてを任せられないなど、
ワン・クッションを置く意味で選挙人をたてることになった。
 - ②アメリカでは1州が1国であるという考え方が根強く、
州としての判断は1つしかないという考え方にたち、
州を代表する選挙人も全員で同一の意思表示をすることとなった。

③選挙人は人口比で割り当てられているのではない。

カリフォルニア州、ニューヨーク州など人口の多いところの利益がアメリカを左右することにならないように、特定の州は首都ワシントンに権力が集中しないように、制度設計の時に工夫がされた。

④人口の少ない州でも不利にならないよう高度な自治権を保証する、平等の考え方が選挙制度を定めた時の基本的な考え方であった。

投票日は11月の第一月曜日の翌日の火曜日と定められ、日本のように日曜日でないのは、キリスト教の安息日を避けたためです。また、建国当時、交通機関が十分に発達していない頃は、月曜日にすれば投票所にたどり着くには、日曜日に出発しなくてはならない人も多く、結局火曜日になったようです。

スーパーチューズデーとは

アメリカの大統領選挙に先立って、各州が民主・共和各党の候補者を選ぶための「予備選挙」が実施されます。そのための予備選や党員集会が多く、州では大統領選の年の2月～3月に集中していて、その日が「スーパーチューズデー」と呼ばれ、今年は3月5日火曜日でした。

トランプ大統領

共和党のドナルド・トランプ氏が2025年1月20日、第47代アメリカ合衆国大統領に就任しました。「米国第一主義」をより鮮明に打ち出し、より煽情的に、より傍若無人になったようです。

戦後80年の節目に4年ぶりに再登板したトランプ大統領が、これからどのように振る舞っていくかは中長期的な世界の流れに大きく影響を与えかねません。ウクライナ戦争や中東危機などで国際秩序は揺らぎ、世界は歴史的転換点にあります。トランプ大統領は、1月20日の就任演説で「常識の革命が始まる」と宣言しました。「米国の黄金時代」をめざし国益を追求する「米国第一」の手法に不安が隠せません。

例えば「領土の拡大」で、メキシコ湾の呼称をアメリカ湾に変更し、パナマ運河の返還を目指すと明言しました。また、同盟国のカナダを「51番目の州に」とカナダを脅しました。これらは相手国の主権を否定するものであり、民主主義国家のリーダーとして極めて問題があると思います。

一方、関税の強化策を打ち出していることで、高関税は世界経済に打撃をもたらし、いずれ米国にも跳ね返っていきます。保護主義はどここの国にも利益にならないことをわかってもらわなければなりません。さらに、気候変動対策の国際枠組み「パリ協定」や世界保健機構（WHO）から再び離脱すると表明したのは、きわめて残念と言わざるを得ません。最近大きな問題となった西部カリフォルニア州ロサンゼルス近郊で起きた大規模な山火事では、温暖化の異常気象による影響を指摘する声もあります。世界一の経済大国であり世界第2位の主要排出国である米国が、途上国の温暖化ガス削減の支援に後ろ向きなのは、他国の消極姿勢につながりかねません。日本の立場としては、米国のこれ以上の保護主義の拡大をくいとめる努力を継続していくことが重要です。

トランプタワー

ニューヨークのマンハッタン5番街をグランドセントラル駅からセントラルパークに向かって歩いて行くと、トランプ氏が所有する高層複合施設ビル「トランプタワー」があります。すぐ隣が映画『ティファニーで朝食を』で一躍有名になった「Tiffany & co.」です。

トランプタワーはその前を何回も歩きましたが、あまりにも高級すぎて近寄り難く、私は一步も足を踏み入れたことがありません。建物は202メートルの高さ、58階建てで、著名な居住者はビル・ゲイツ、ビヨンセなどのセレブリティのほかに、NYヤンキースの松井秀喜が住んでいました。

映画『ホームアローン2』にトランプ氏出演

余談ですが、皆さん『ホームアローン2』という映画を観たことがありますか？『ホームアローン』は1990年公開のアメリカのコメディ映画です。ファミリー向けのクリスマス映画で、1992年には『ホームアローン2』が公開されました。シカゴ在住のケビン一家はクリスマス休暇でフロリダ・マイアミ旅行を計画していましたが、両親の手違いもあり、空港でケビン少年は家族とはぐれてしまいます。家族はフロリダに着いたのに、ケビンは飛行機を間違え、一人でニューヨークへ着いてしまいます。ケビンはマイアミではなくニューヨークに着いたことに気が付き一人で観光を始め、セントラルパークで鳩の大群を従えているホームレスの女性と遭遇して怖くて逃げだし、プラザホテルに迷い込みます。そこで、偶然トランプ氏に会い道を尋ねるシーンがあります。

孫と一緒に『ホームアローン2』の録画を観ていて、画面に映る人物を指さすので、私も「おやッ」と思い、「あれッ、トランプが映画に映っている」と気が付き、なんで？。なんで？『ホームアローン2』にトランプ大統領が映っているの？と思っていました。そこは、便利な世の中、早速、検索してみました。

この映画監督がスタジオセットでの再現が難しいプラザホテルのロビーは、撮影料を支払えば撮影可能と聞いたので実際のホテル内で撮影することにしました。撮影料を支払った後に、当時、プラザホテルのオーナーだったトランプは「君らがプラザホテルを使う唯一の方法は、私（トランプ）が映画に出演することだ」と自分自身の出演を撮影条件に提示したため、やむを得ず、出演させることになったようです。

なるほど、不動産王として、グレイトデールをしているトランプならでの強引な「取引術だな」と。監督は撮影後に該当場面の削除を目論んでいましたが、試写会でトランプが登場すると、観客が歓声をあげて喜んだそうです。「トランプは生かそう、映画は観客のための時間だ」と編集スタッフに伝え、トランプが映っている場面は残ることになったそうです。大したもんですね。（了）

【ニューヨークの思い出写真から】





曾祖父「太郎太」

常任理事 二神 重則

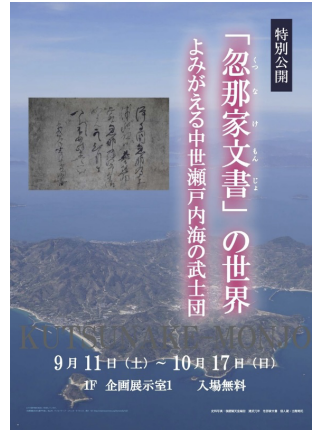
2021(令和3)年の秋、愛媛県美術館で「忽那家文書」の展示が行なわれました。愛媛県の宝物であり多くの人が公開を望んでいたものです。何らかのお家の事情で、今まで公開できなかったと記憶しています。

因みに「忽那家文書」は、かつては中島町指定文化財でしたが愛媛県指定文化財になり、2009(平成21)年7月10日に国の重要文化財に指定されました。鎌倉時代初期から戦国時代に至るまでの忽那氏関係113通の古文書です。「忽那島 相伝之証文」(卷子本3本)のほか、「忽那一族軍忠次第」「後醍醐天皇綸旨」「伊予国忽那藤原相伝系図」「忽那島開発記」「小笠原流弓馬秘伝」「懷中守秘伝」から成っています。個人蔵ですが、現在は愛媛県美術館に寄託されています。

手元に「忽那家宗家調査要録」という報告書のコピーがあります。愛媛県の郷土史家西園寺源透氏が1918(大正7)年に報告書を愛媛県に報告しています。内容は、愛媛県知事から依頼を受け「忽那家の本家はどこか?」ということ进行调查したものです。

この報告書の中に曾祖父の二神種雅の名が出てくるとは思いもかけないことでした。系図上では種雅、戸籍では太郎太です。種雅の人物評として報告書の中に「性質温良正直にして曾て偽言を吐かず、且つ中島の古事に精通」と書かれています。他家の裁判争いのことにて詳しい説明ができませんが、文面からは「情けよりも義を重んじた人物像」が伺えます。思いもかけなかった資料から、曾祖父の人柄を知る事ができました。

曾祖父の名が太郎太と知ったのは、ごく最近のことです。本家の



系図では種雅となっていました。この資料で太郎太との名前の由来を知る事ができました。

二神さんのお家では、代々名前に「種」の字が使われています。私どもの家系は、私の代まで長男に種を付けたようです。先年、母を亡くした折に、貯金の解約で戸籍謄本が必要になり取り寄せました。私が二男であることは十代の終わり就職時に知りました。兄の種和は両親が京都に住んでいた時に生まれ、間もなくして亡くなったそうです。終戦前の1944(昭和19)年に両親は松山に帰り、私は松山市魚町(現、松山市本町3丁目辺り)で生まれました。1歳になる前の7月26日の松山大空襲に遭い、誕生祝のお米を持って防空壕に逃げたと母が言っていました。両親が終戦の混乱の中でどのようにして私を育ててくれたかは分かりません。ただ想像するだけです。聞いておけばよかった・・・もはや知る人は一人もいなくなりました。

「忽那家宗家調査要録」で曾祖父の名前や人柄を知る事ができました。太郎太の戸籍には、「本籍地は愛媛県温泉郡西中島村吉木635番地。1901(明治34)年11月26日に、1878(明治11)年11月13日生まれの長男(私の祖父幸種)に家督相続をした」とあります。

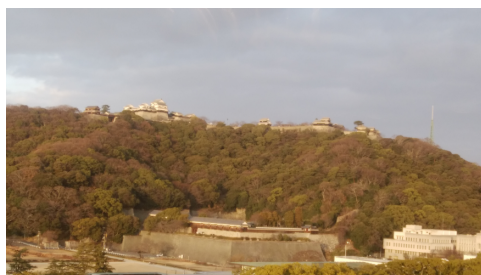


【愛媛県温泉郡西中島村吉木(現、松山市吉木)風景(昭和30年代)】

偶然とご縁と 同年会での出会いから

常任理事 二神 重則

2023(令和5)年の年明けに、愛媛県立松山商業高等学校の同年会がありました。当時の「昭和38年卒」は約450名の生徒がいたと思います。その中の「二神姓」は3～4名だったと記憶しています。



【松山城遠望（東京第一ホテル松山から）】

同年会の開催当日は良く晴れていて、会場のホテル（この年を最後に廃業）から松山城がきれいに見えました。出席者は25名程度で5カ所の島になって席は、くじ引きでした。それが何と、お隣が村上一恵さん（旧姓、二神）、そのお隣が二神軍平さんと二神が3



【令和5年1月9日 同窓会にて】



【令和5年4月26日 「白魂」】

人並びました。偶然とはいえ、このようなことがあるんですね。高校の３年間、三人が一緒のクラスにはなりませんでした・・、フタガミさん恐るべし。

村上一恵さんは二神系譜研究会が立ち上がる前に、会員の募集反応を見るために全国の電話帳で調べた二神さんの一覧から、名前に「種」の字が付いている人と、特定の地域の方に資料を送りました。種の付いていたかたからはほとんど例外なくご返事があり、早速お近くの該当者を訪ねました。その中に一恵さんの父上種興さんが居られました。種興さんは熱心な方で、総会やイベントには必ず出席されていました。まさか、その娘さんが同期だったとは。

二神軍平さんは「ユニ・チャーム(株)」の取締役になられたとき新聞に掲載され、当時の事務局長の英臣さんと話に出たことがありました。また、会長の俊一さんとは松山商科大学（現、松山大学）の同期でした。なんと！系譜はお話しの断片から、私と同じ系譜の吉木（中島）らしいとのこと、これはまた！

古文書との出会い

余戸二神氏 二神 美知子

私が古文書を習いたいと思ったのは、父のことが頭にあったからです。父は趣味で書道をやっておりました。小学生の頃、私の役目は父の横で墨を磨ることでした。父は南側の日当たりのよい6畳ほどの廊下部屋で、毛布を敷きその上に画仙紙をおき、毎日書いておりました。

父が亡くなった後の整理で、父の書いたものはプラスチックの衣装ケースが16個にもおよんでいました。漢詩、漢文、般若心経などを書いておりました。今でも父の書いている姿が目に残ります。また、いつも書の読み方や内容を教えてくれました。私の頭の中にはあまり入っていませんでしたが、父の姿は今でも目に残っています。そんな関係で古文書に興味を持ち、古文書解説を始めました。

最初は、現在、当会の顧問である萬井良大先生による「NHK文化センター」主催の「中世の古文書解説」でした。しかし、古文書はなかなか難しく、先生がくださる資料が溜まる一方でした。その反面、中世の歴史のお話を聞くのが楽しみでした。父が生きていれば何でも聞けたのにと、何度も思いました…。その後、その教室が無くなり、現在は「渡部家古文書の会」に参加しています。この会は、渡部家（松山市東方町）に残っている資料で、襖などの内張りを剥がす作業から入りました。そして、それらをもとにして解説していきます。先生は、古文書をずっと勉強してこられた「まつやま文化財サポートの会」の中城康圓先生です。資料は毎回、中城先生が作ってくださり、10人ほどが参加し勉強しています。先生が言われるには「とにかく古文書をたくさん見ることです」と…。



【右から2人目が筆者】

今、読んでいる古文書は明治期のものです。その当時の背景や事情が分かり面白いと言いますが・・・私は毎回、資料と“にらめっこ”です。辞書を片手に、まず部首、篇、旁（つくり）などを調べ、似ている文字を探します。見つけたときの嬉しいこと・・・でも、文字が分かっても文章の続きができなければだめです。月に1回、みんなで読んでいきます。分からない場所も、分からない個所も分かっています。そこで、しっかり頭の中に入れればいいのですが、すぐ忘れます・・・そんなことを繰り返しながら勉強しています。このことが当会で役に立てばいいのですが、まだまだ程遠いです。

これからも自分なりに楽しみながら、頑張っていきたいと思います。

平成に見る忽那氏と二神氏との縁

副会長 豊田 渉

私の手元に二神弘さん（吉木二神氏、愛知県日進市在住）から愛媛県温泉郡中島町小浜の忽那信道さんに宛てた手紙がある。消印は1997（平成9）年3月18日付と4月22日付のと2通ある。なぜ私が持っているのかについては、私が二神系譜研究会に関わりがあることを存じていたご子息の忽那道人さんから「二神さんから親父に来ていた手紙があった。参考になるかも・・・」ということで、預かったのではと思う。



【忽那信道さん】

内容は、元中島町教育長の忽那信道さん（昭和15年卒）が、愛媛県立松山東高等学校同窓会誌「明教」27号（平成9年3月発行）で「二人の特攻隊長」と題し、二神勝さんとのことを書かれている。それを読んだ勝さんの兄弘さんがお礼を認めた手紙である。「明教」27号は、松山東校の同窓会事務局を訪ねて確認しコピーしていた。

忽那さんが「明教」27号に載せた文章は次のとおりである。

二人の特攻隊長 忽那信道

謹啓 新緑の候 ますますご清祥のこととお喜び申し上げます。

さて、先日遠路ご来館。ありがとうございました。

ご来館の際に一術校当直士官にお渡ししたお写真

戦闘第302飛行隊員

故海軍少佐 二神 勝氏（昭和19年12月2日戦死）

第一神風桜花特別攻撃隊神雷部隊攻撃隊

攻撃第711飛行隊 故海軍大尉 西原雅四郎氏（昭和20年3月21日戦死）

お二方のお写真、教育参考館で確かにお預かりいたしました。他の戦死者の

遺品などと合わせて、大切に保存管理いたしますのでご安心ください。
まずは取り急ぎ。ご連絡申し上げます。
時節柄ご自愛のうえ、ますますご健勝を心からお祈り申し上げます。謹白

平成6年5月12日

海上自衛隊第一術科学校
教育参考館 新宮 武雄

この便りは、江田島旧海軍兵学校の資料館長新宮士官からいただいた原文のままである。

松山中学時代二神君は副級長、西原君はその席が私のすぐ後ろとクラスを共にしていた。二人とも明朗で、数学は特に抜群であった。二神君はその家が元々西中島村（現・松山市）の出身ということで親しみがあった。西原君はよく映画に行っては、それを話してくれた。時には「日切り焼き」を差し入れてくれることもあった。こうした中で、お二人が海軍兵学校を卒業する前、それぞれの写真をいただいていた。その写真は以来私のアルバムに保存され、中学時代の思い出とともに冥福を祈ってきた。納めた写真には、昭和32年10月15日の愛媛新聞の記事も添えておいた。



【忽那信道さんの同級生の
二神勝少佐（愛媛新聞から）】



【二神勝さんの兄、二神弘さん】

この文章を読み、忽那信道さんと二神勝さんは松山中学の同級生であったと知った。私が中島町に勤めているとき忽那教育長にはお世話になった。忽那一族の末裔でもある教育長に、もっと詳しく聞いておくべきだったと思うと残念でならない。二神勝さんの兄弘さんは、会報「海の民ふたがみ」第8号（平成17年：2005、8月発行）で「吉木二神家と第二次世界大戦」と題して、ご兄弟のことを紹介されている。

中世からのつながりがあるであろう忽那氏と二神氏。平成の時代にもそのつながりがあり、ずっとつながってきたのだと思うと感慨深いものがある。

2025（令和7）年は、太平洋戦争終結から80年になる。戦争を知らない私ではあるが、争いによって得られるものは何一つとして無いと思う。命をかけて戦った先人に感謝を捧げたい。



【二神弘さんから忽那信道さん宛に届いた手紙類】

二神系譜研究会会則

(名称及び事務局)

第1条 本会の名称は二神系譜研究会とし、事務局を当分の間事務局長宅に置きます。

(組織)

第2条 本会は二神の姓を持つ方々及びその縁者並びに二神の歴史に関心のある方あるいは本会の目的に賛同する有志をもって組織します。

(目的)

第3条 本会は、二神氏の発祥、発展を経て、全国に拡がってきた二神の系譜を科学的に調査・研究するとともに、関係する他の研究グループとの交流を図り、また、会員相互の親睦を深めることを目的とします。

(事業)

第4条 本会は前条の目的を達成するため下記の事業を実施します。

1. 二神氏の系譜、歴史文化の調査・研究を行ないます。
2. 前項の結果を踏まえて会員等を対象に学習研究会、交流会等を適宜開催します。
3. 会報『海の民 ふたがみ』及び『二神系譜研究会速報』『事務局のうごき』を発行し、ホームページ「二神系譜研究会」を掲載します。
4. 他の氏族等の研究グループとの交流を図り、情報の交換を行ないます。
5. 資料の蒐集整理及び保管を行い、会員等の閲覧に供します。
6. 会員相互の親睦を図ります。
7. 必要な地域に支部を置き、支部会を開催します。
8. その他、本会の目的達成のため必要な事業を実施します。

(役員)

第5条 本会に下記の役員を置きます。

会長	1名
副会長	2名
事務局長	1名
理事	若干名
常任理事	理事の中から数名
支部幹事	各地域毎に2～3名
監事	2名
顧問及び相談役	若干名

会長は会員中から総会において推挙します。他の役員は会長がこれを委嘱し総会に報告します。

(役員の仕事)

第6条

1. 会長は本会を代表し、会務を統括します。
2. 副会長は会長を補佐し、会長に事故のあるときは会長の職務を代行します。
3. 事務局長は本会の事務を遂行するとともに会計を担当します。
4. 理事、常任理事は本会の会務を掌理します。
5. 支部幹事は支部会の会務を処理します。
6. 監事は本会の会計を監査します。
7. 顧問及び相談役は本会の事業に適宜指導・助言を行ないます。

(役員の任期)

第7条 役員の任期は2年とし、再任を妨げません。

(役員会)

第8条

1. 理事会 年数回開催し、本会の企画運営について協議します。
2. 常任理事会 事務局近辺の地域の理事によって組織し、会長を扶けて事業の推進にあたり、会報の作成を担当します。

(総会)

第9条 本会の事業を総括するため、総会を開催します。

1. 総会では、下記の事項を審議・決定します。
 - (1) 年間の事業報告及び事業計画の決定。
 - (2) 1年間の会計報告、会計監査報告及び予算計画。
 - (3) 役員の改選
 - (4) 会則の変更
 - (5) その他会務の遂行に必要な重要事項
2. 総会は原則として毎年4月に開催します。
3. その他、会長は必要に応じて臨時の総会を召集することができます。
4. 止むを得ない事情が発生した場合は、書面総会を開催することができる。

(会計)

第10条

1. 本会の会計は、会費及び寄付金をもってあてます。
2. 会費は年間一口5,000円とし、一口以上納入するものとします。
3. 特別な事業を行なう場合は、寄付金を募集し、特別会計によって処理します。
4. 会計年度は4月1日から翌年3月31日までとします。

【改正履歴】

1. 2000年3月12日・会則制定
2. 2009年5月10日・第7条（役員の任期）第10条2項（会費）改訂
3. 2011年4月17日・第5条（役員）第6条（役員の任務）第8条（役員会）改訂
4. 2012年4月15日・第4条（事業）改訂「事務局のうごき」を追加する
5. 2015年4月11日・第6条（役員の任務）改訂
6. 2016年7月15日・第5条 関連「特別調査研究班の設置」と会長による委員委嘱
7. 2018年4月28日・第9条（総会）4項（書面総会）を追加する
8. 2021年4月30日・第5条（役員）副会長2名とする

二神系譜研究会役員名簿

役 員 名	氏 名	主な担当・エリア	出身系譜
会 長	二神 俊一	総 括	畑中二神氏
副 会 長	二神倫一郎	組 織	本島二神氏
副会長・事務局長	豊田 渉	企画・調査	豊田氏
相 談 役	二神 英臣		小川二神氏
相 談 役	二神チヲリ		畑中二神氏
顧 問	萬井 良大		
常任理事	二神興三郎	渉外	土居二神氏
常任理事	二神 重則	組織	吉木二神氏
常任理事	峰岡 秀和	調査	峰岡氏
常任理事	二神美知子	会計・広報	余戸二神氏
監 事	二神 良昌	財務	吉木二神氏
監 事	二神 裕寿	財務	本島二神氏
理 事	二神 康郎	関東支部	港山二神氏
理 事	二神 元信	関東支部	松山二神氏
理 事	二神 延平	関東支部	城辺二神氏
理 事	二神 久藏	関西・中部支部	城辺二神氏
理 事	東倉 和賢	関西・中部支部	本島二神氏
理 事	二神 敬志	関西・中部支部	小才角二神氏
理 事	二神 信也	関西・中部支部	松山二神氏
理 事	二神 勇	九州・西部	東予二神氏
理 事	二神 光次	九州・西部	余戸二神氏
理 事	二神 國廣	四国支部	一本松二神氏
理 事	二神 英輔	四国支部	一本松二神氏

編集後記

会報第20号の発行から3年、長らくのご無沙汰でしたが皆様のご協力ご支援をいただきながら、第21号を発行することができました。

思えば第20号発行の頃はまだ、コロナ騒ぎの中でした。日本国内では2020年1月15日に最初の感染者が確認された後、多くの感染者や亡くなった方が出てきました。2023年5月から感染症法上の位置づけが2類から5類に移行され、その後、減少傾向にはなりましたが、終息したわけではありません。

さて、この3年間当会としてコロナのせいにしたわけではありませんが、全体的にも活動が制限され、そのあבק縮小や停止などをした例も多々見受けれます。2022～2024年の当会の主な動きは次のとおりです。

● 2022(令和4)年：3月31日、会報第20号発行。6月18日、初代二神浩三会長13回忌墓参。10月、<https://keifu2gami.com/> 当会ホームページアドレス変更。

● 2023(令和5)年：3月13日、神奈川大学日本常民文化研究所展示室は「常民文化ミュージアム」としてリニューアルオープン。3月19日、常民研ご一行4名、二神島へ。5月21日、4年ぶりに定期総会(東京第一ホテル松山)開催。11月9日、日本常民文化研究所見学ツアー14名参加。

● 2024(令和6)年：1月3日、愛媛新聞で二神島見開きで紹介。6月15日、定期総会(道後友輪荘)開催。8月3日、「定期船でめぐる二神島&津和地島」22名参加。11月6日、常任理事で「宅並二神衆墓石群のお堂」状況確認。

現在の二神島の状況は、3年前よりも人口は半分の50人ほどに。二神ご本家の建物も昨年、倒壊。二神家墓石群もイノシシによって倒されたりしています。大変な状況ですが、それでも島でがんばって生活している人たちがいることも事実です。現実には、何をどうするのかということにはなるのですが、まずは応援者として「二

神島」を思う気持ちを持っていただければと思います。

今号の編集集中に富士通製パソコンが言うことをきかなくなりました。新しくして9か月目。「キーボードレイアウト」という文字が出てクリックしてもその場面に戻るだけ……。結局はハードディスクの交換となり、中のデータはパーに。そう簡単にパソコンが壊れるという思いはなく、データのバックアップをしていなかったのです。パソコンの復旧まで数週間を要するとのことで、忽ち、いただいた原稿を一から打ち直し……。昭和世代には今のデジタル機器にはなかなかで苦勞の連続。それでも、避けては通れない状況でもあります。人工知能（AI）が文章、音楽、映像などを作れるようにはなりましたが、人間の役割は？未来は？と戸惑うばかりの世の中になっています。嗚呼。（豊田 渉）

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇ 二神系譜研究会への連絡先 ◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

会長

二神 俊一 〒 791-0243 松山市平井町 3020
TEL・FAX:089-975-1650
Email: shunichi@futagami.se

広報

二神 重則 〒 791-0243 松山市平井町 甲 2169 - 43
TEL・FAX:089-976-5179
Email: westengehen @ tempocn.ne.jp

事務局長・冊子編集委員長

豊田 渉 〒 791-1101 松山市久米窪田町 400 - 9
TEL:089-970-6140
Email: wakkun492 @ leo.e-catv.ne.jp

会計

二神美知子 〒 790-0808 松山市若草町 6-2-303
Email: m-futagami @ tau.e-catv.ne.jp

海の民ふたがみ 第21号

2025(令和7)年3月31日発行
編集・発行 二神系譜研究会
791-0243 愛媛県松山市平井町 3020
TEL・FAX 089-975-1650
URL:<https://keifu2gami.com/>

編集・印刷 ネクスス愛媛
TEL 070-5514-2701
Email: nxsehime@gmail.com
URL:<https://nxsehime.jp/>